

# カウンセリングから考察する 「人心の開発と救済の原理」

水野 修次郎

## 目 次

1. モラロジーでいう人心の開発と救済
2. 先行研究
3. 「人心の開発」の現代的意味
4. 結論—モラロジーとカウンセリング

### 1. モラロジーでいう人心の開発と救済

廣池千九郎は、モラロジーという総合的道徳科学によって学問の標準を示した。廣池によると諸聖人の教説や行動と一致する学問体系は、知識と道徳が一体になったものであり、人類の生存・発達・安心及び幸福を実現する基盤となっている。このような経験・知識・慣例・習慣・政治・法律もしくは道徳を有する社会や団体がよく発達し繁栄していることを発見した。廣池は、この学問体系を純粹正統の学問と呼んだ。

多くの学問は人間の自己保存の本能や利己的な動機で形成されたもので、部分的、反動的、破壊的、革命的などの要素を含み、純粹正統の学問の標準とは異なるところがある。

人心の開発とは、純粹正統な学問を人間に注入し根本的に人格を改造する必要性を理解し、その教を実行できるようになることを意味する。救済は主として宗教の用語だが、廣池はこの力強い用語を使いその意図するところを表現しようとした。救済とは根本的に自己の人格を改造し、自己の最高品性を形成することを道徳実行の動機とすることとした。この態度は、ある種の宗教団体のように団体拡張のために積極的に救済活動に邁進するのとは異なり、消極的という特色がある。つまり、自己の過去における過失もしくは罪悪の解脱を目指すことによって、漸進的に自己の品性を向上させることである。このようにするならば、慈悲・至誠・温和・円満なる人格となり世界の平和を望む人格になることができる。このような人は、同時に精神生活や物質生活に関してもかなりの知識を有することも求められる。

開発の方法は、正規の学校教育で行なうことがより完全なものになる。その他、社会教

育や生涯教育によって実施することができる。教育は、個人的に実施され、ひとりひとりの心に慈悲の心が移植されることを意味し、人格の感化を必要とする。

モラロジー教育によって実践されていることは、心づかみや精神性の強調である。生活すべてから学ぶ自発・自治の生活である。この自治という意味は、自然の法則に従い、自らその行動を正すという意味である。また、自己の成り立ちの恩人である親子のつながりを感じ、国家や世界の平和を望む人格の育成を目指す。

人心の開発と救済は、単なる表面上の正義を行なう以上の行為である。多くの人は、自己の所属する団体を受容するがゆえに、そのことに不忠な個人を憎み攻撃することもある。ところが、人心の開発と救済に努力する人は、その人をも慈愛の精神や人心の開発の精神で接し、その団体やそれに所属する人々すべてを益するように努力することができる。このようにすれば三方向（自己、相手、第三者）すべてを益することが可能になり、その効果も自己の感情や利害行為から行動するのとは大きな違いが生じ、大きなポジティブな影響がある。そういう意味では、心の開発と救済の原理は個人の安心・平和・幸福だけでなく世界平和を実現する原理といえる。

## 2. 先行研究

ここでは、カウンセリングに関する論文で『モラロジー研究』で発表された2つの論文を概観して、今までの議論を要約したい。

まず、下程論文は、「カウンセリングの人間学的基礎」において、カウンセリングは本来性を得るための援助として定義した。本来性とは、自己との関係に対しては、自己同一性を得て、他者との関係に対しては共感できることが基本となる。これが達成できない個人は、さまざまな非本来の姿をとることになる。人間の本来性は、身体、精神、社会生活のホメオスタシス（内部環境の恒常性）を保つ装置によって保たれている。特に、人間の身体はこのホメオスタシス装置によって不安定な物質でつくられているにもかかわらず安定を維持することができる。しかし、人間は現実との接触によってさまざまなストレスを体験し、非常事態を体験する。この試練に耐えられない人は、現実から逃避し、対自己、対他者との関係を喪失する。

そもそも人間は、求心的方向（胎児的自己愛）と遠心的方向（自己の確立）の2つの方向の中に存在する。本来は、精神的離乳をして人間の本来性を獲得していくのが成長なのだが、非本来の方向に進むと、現実との接触を避け、胎児的自己愛のままの状態で大人となる。これらの人が社会的病、精神的病、身体的病を体験することになる。

人間は、「離接性の原理」母胎から離れるが、真に共感的に接することによって離乳していく（はらがすわる）。自己確立し独立するが、相互共感的な「つながり」を体験する（むねをひらく）。しかも、「もちまえ」という唯一独自性を実現していくのである。

下程論文は、実に明確に人間存在の本質を記述し、教育的手段としてカウンセリングが果たす役割を定義している。すなわち、人間を神秘的な存在として扱うのではなく、身体性

と精神性をあわせもつ、安定しているが、いつでも安定が壊れる存在としてみていることである。その本来性は、自己の関係、他者の関係を保つことによって達成される。この関係性を促進するのがカウンセリングの役割である。

御法川論文「モラロジーカウンセリングの確立を求めて」は、モラロジーカウンセリングの人間観の特色を5つ上げている。

- 1 意味の探求—出来事にはすべて意味がある。
- 2 日々の生活の実現—他人への思いやりに満ちた生活。
- 3 自己反省の意味—自分自身へのとらわれからの解放。
- 4 感謝生活の実現—つながりを自覚し、感謝する。
- 5 三方善しの実現—つながりの回復と自己の実現。

これらの人間観の実現を目指して、モラロジーカウンセリングは以下の段階を踏むとした。

- 1 段階—信頼関係の確立（受容、共感的理解、真实性、理解し必要に応じて対処）
- 2 段階—心の深まり（安心感をかもしだす）
- 3 段階—対立（葛藤の本質を発見、理解）
- 4 段階—枠の崩壊（固い枠を壊して、柔軟になる）
- 5 段階—再統合（柔軟な生き方を受け入れる）
- 6 段階—意味の確認（苦難の意味を理解する）
- 7 段階—新たな生き方の創造・確認（深い愛、大きな力にゆだねる祈り）

御法川論文は、カウンセリングのプロセス理論を応用し、モラロジーの人間観にそってカウンセリングの目標を定めるという特色がある。モラロジーカウンセリングは、その手法はカウンセリングのプロセスを受け入れて、その中でモラロジーの特色である自我没却の原理、伝統の原理、人心開発救済の原理を応用しようという試みであった。つまり、自己保存の本能によってがちがちに固まった自我をほぐし（自我没却）、恩と愛を受け入れ（伝統の原理）自己を再統合し、他者との関係性の再構築（人心の開発）をするというものである。その意味では、御法川論文は、人間存在の本来性を基礎にして、社会生活の中での交流を通しての人間的な成長過程を示しているともいえる。このプロセスは、新しいものではなくてロジャーズ（C. Rogers）のいうカウンセリングプロセスと同じものともいえる。

このように開発には、2つの議論が存在する。つまり、①人間存在の本来性と非本来性について、②対人交流、社会の中の存在としての人間、である。そこで、次に本稿の目的である人心開発の現代的科学との関係を考察し、その特色を浮き彫りにしてみたいと思う。

### 3. 「人心の開発」の現代的意味

人心開発という場合には、大きく2つ考えることがある。ひとつは、人心とは何か。次

に開発とは何かである。

人の心は、意識・無意識ともに不完全な働きをすることは、宗教・哲学・科学ともに認めるところだ。宗教では、不完全な人間行為（意識・無意識ともに）の結末として生じる〈過失や罪〉を、シンとか心のホコリと呼び、その浄化や贖罪をすることを宗教の重要な教えとしている。

### （1）暗い人間の心

現代科学によって、脳がさまざまな誤りを犯すことが実証された。例えば、理知的な脳が原始的な感情（怒り・恐れ・不安）にハイジャックされて、十分に機能しなくなるメカニズムが解明されている（ゴールマン『EQ こころの知能指数（Emotional Intelligence）』講談社、1998年）。従って、人間の行動科学（行動理論、ボウエン理論、家族システム論など）によって、人間は理知的に行動するためには、かなりの訓練を積む必要があると指摘された。

次に開発とは、このように〈不完全で暗い〉人間の心に明かりをともし、より過ちの少ない心つかいや行為をするようになることである。モラロジーの創立者廣池千九郎によると、この明かりは、真の知恵（宇宙的な正義、自然の法則）によってもたらされ、そのような真の知恵は、人類の歴史の上で聖者でも最高の人物によって明らかにされた。また、現代の科学による学問的な業績で真理に近い発見も、その知恵の一部に含まれる。

それでは、不完全な人間の全人格をより過ちの少ない人格に根本的に変革させる力のある真の知恵とは、何だろうか。廣池千九郎はそのような知恵は、人間の単なる主義や主張・意見や偏狭な信仰から生じたものでなく、自然界の力から生じるとする。また、そのような知恵は、科学的な真理とも一致すると述べている。つまり、自然界の力によって養育されている人間は、その自然の法則を知り（真理の発見）、それに従うように努力することが、根本的に人格を改造することになるというのだ。このように努力することによって、こころに明かりがとまり、意識的・無意識的ともに不完全な行為をしていた自己の本当の姿を知り、それを根本から変革させるために、過去の過失を償う精神が養われる。

ところが、われわれ人間は、自然界の力に支配されていると同時に、不完全な人間界の世界にも住んでいる。つまり、人間社会や人間関係は、この不完全といえる人間精神によって営まれていると考えられる。さらに、人間の心に明かりをつけるために、他の人間の人格を介在することが必要になる。なぜなら、人間は、人間関係の中で成長し機能するからだ。さらに、個人は他者という鏡を得て、はじめて自分の心の姿が映し出され、その姿が明らかになるからである。そこで、開発とは、ある人間が他の人間を対象に実施する行為であり、不完全で未熟な人間の行為なので、いくつかの重要な注意が必要になる。

### （2）開発のプロセスと方法

注意点のもうひとつは、開発のプロセスである。廣池によると、開発のプロセスは、一般的には、開発する側が対象となる人物に対して、自己の知識で刺激を与える、感激を与える、真の知恵の生命を吹き込むとある。つまり、ひとりの人間がもうひとりの人間の

格（知・情・意のすべてに）に感化を与え、さらにその人の人格の生命をもうひとりに移植するというプロセスとなる。

一般的には、クライアントを大きく3つのタイプに分ける（Clara E. Hill, 2009）。つまり、問題や悩みがあることを意識していない人、他人が悪いと攻撃し自己が変わろうと努力しない人、環境や他者が変わるだけでなく自己も成長する必要があると感じている人である。それぞれのタイプに応じて、個人を尊重しながら対応することが望まれる。つまり、人生がうまくいかないが、何か問題があると感じていない人には、人生の課題について触れて、他者を批判ばかりする人には、その気持ちを十分に受け止める。また、十分な成長を望む人には、建設的な案を作る援助をすることができる。

一般的に不適応な行動や望ましくない行動が変容するプロセスは、プロチャスカから（Prochaska, et. al, 1992）によると、次の5つの段階モデルを提唱している。

- ① 熟考前（自分に問題のあることに気が付いていない）
- ② 熟考（問題があることに気が付いているが、変化させる行動までいたらない）
- ③ 準備（行動を変化させる準備をしている）
- ④ 行為（自分を変容させるために行動する）
- ⑤ 維持（行為したことを継続する）

この5段階は、ラセン的に発展するもので変容が完結するまでに何回も繰り返し、時には後戻りする。

従って、人間が行動を変容させる時は、直線的な段階やプロセスを進むとは限らない。熟考前には、人間関係や信頼関係（ラポール）を形成することを第一にする。知的な理解は熟考段階まで待つと、よい結果が望める。行為に駆り立てるのは、知的な理解だけでは不足している。行動を起こす十分な動機には、感激するという情動の力が必要になる。次の段階は、モデルの提供である。開発する人の精神的な生命が力となり変容への努力が援助できる。

最近、もっとシンプルで分かりやすいモデルが提示された。クララ・ヒル（Hill, Clara, E., 2009）は次の3段階のカウンセリングモデルを提示し、それぞれの段階でカウンセラーがすることを提案した。

- 1 探査段階（exploring stage）  
傾聴し理解し、観察し、認知、感情を探査する。
- 2 洞察段階（insight stage）  
アウェアネスを促進、洞察を得る。即時に対応する。
- 3 アクション段階（action stage）  
行動に取りかかる、リラックスする、行動変化を起こす、変化のリハーサルをする、決心をする。

カウンセリングによる変化を促進する技術は、無数にあり400種類あるとされている（Prochaska & Norcross, 2010）。しかし、大きくまとめると以下の9種類（Prochaskaら, 1992）になる。

①現象を意識する方法は、観察する技術、対決し矛盾を明確にする、また現象の解釈をすることによって、意識化できる領域を増やしていく。

②社会的に解放する方法は、クライアントの本来もっている能力を発揮できない障壁があるので、それを排除し、権利を擁護すべく社会システムに介入する。

③感情に働きかける方法は、さまざまな感情を表現することによって、その感情を自分のものとして所有し、表現することによって明確化する。

④自己の再評価方法は、自分が大切にしている価値を明確化し、自己知識を増やし、感情体験を修正する。

⑤献身方法は、何かをすることを選択し、それに献身的に没頭する。自己決定の大切さを知り、意思によって変化できることを知る。

⑥反論方法は、問題を生じている行動にとって代わる代替方法を案出し、それを実行する。緊張しているならば、リラクゼーション方法、健全な自己主張ができないならばアサーショントレーニングをする。

⑦環境のコントロール方法は、環境から問題行動を起こす刺激を排除し、環境を再構築する。

⑧報酬方法は、自己に褒美を与えることによって変化を促進する方法である。

⑨援助関係は、他者との同盟や信頼関係を構築することによって、変化を促進する方法である。

それぞれの技法には、それなりの効果があることが実証されている。その意味では、どの技法にもそれなりに有効性があるといえる。もちろん、これらすべてに共通する要素が指摘されている。それらは、①援助者と被援助者との関係性の質、つまり信頼関係である、②援助者と被援助者の相互関係によってカウンセリングが促進する、③この関係性は、単なる情報伝達ではなくて人間的交流である、④専門性に支えられた技術は、人間性を深めるのに役立つ (Kelly, 1994)。

### (3) 開発の関係性

開発する人とされる人との関係は、どうなるのだろうか。また、カウンセラーとクライアントの関係には上下があるのだろうか。開発する人が上でされる側が下という上下の力関係なのだろうか。開発する人は、される側よりも少なくとも真理をより多く知っているという意味では、開発する人の方が多少とも優れているのだろうか。そうではない。人格と人格の出会い、同じ地平線であって始めて可能になる。開発される側が、理解できないことや、早すぎる解釈や、深すぎる解釈は、理解不能で、時には、益になるどころか傷つけることにもなる。ロジャーズ (C. Rogers) によると真に深い共感とは、開発される側が理解できるほんの1歩先に行く、あるいは、アイマイで言葉にすることが困難なことを、具体的に表現し理解できるように援助することが、開発の第一歩となる。そのために、カウンセラーはクライアントよりも、多少精神の混乱が少なく自己の一致 (congruent) の程度が高く、あるべき姿と現実の姿がより重なることが望ましい。

廣池によれば、開発する側が開発する努力を積むことによって、その人が開発されて人格・品性が向上するとする。最後には、どちらが開発されるのかわからなくなることになる。真にケアするところは、相手を粘土細工のように思い通りに加工することではなくて、開発する側もされる側も共に変化し成長することである (Mayeroff, 1965)。つまり、人が成長するのは、二者の本質的な相互性、特に信頼関係が重要なファクターになる。ロジャーズ (Rogers, 1986) はカウンセラーの役割は、「セルフ (自己) の中心をなす核に向かう旅のコンパニオンである」と述べている (『ロジャーズ選集上』)。人格の中心となる核に向かって旅をすることは、大変な困難な旅行計画である、それには時にはくじける心を勇気付け、ともに旅行するコンパニオンが必要になる。

廣池は、開発する側もされる側もともに十全な人間として機能する人間関係に入るとしている。つまり、単なる人間を大切にしなさいと言っているのではなくて、救済という人間関係の中に、人間を十分に機能させるポイントがあると指摘したことになる。この視点は、ロジャーズのいう「プロセスの中での出会い」に似ている。人間と人間の出会いは、不完全な人間が人間になる (becoming a person) 途中での出会いでしかないのだ。より成熟した人間との出会いはありえるが可能性はより少ない、私たちの普通の出会いは途中での出会いなので、お互いに未成熟な人間としての出会いである。

この人間と人間の出会いには、無意識という厄介な問題が存在する。未熟で不完全な人間の心には、数々の過去の未解決な問題や抑圧されたエネルギーが埋まっている。これは、個人だけではなくて、何世代もの過去から受け継いだ個人の人間関係の癖あるいは習慣とも言える。

例として、「あの人と会っていると、私の父を思い出す」と心の中で思ったとしよう。仮に、その人の父の思い出は「頑固で強引で自分の意志を通す人」というイメージがあるとする。そのイメージは、無意識に相手に投影される。現実には、その人は父と別の個性を持った人であることを忘れてしまい、まるで父と同一の人格のように感じられてくる。そこで、不合理な行動をしがちになる。この無意識な不合理さをフロイトは転移と呼んだ。つまり、すこしでも自分の気持ちに従わないと、無意識の空想が一人歩きして膨らみ、イライラしたりすることになる。

また、開発される側も、相手を理想化して現実よりも高く評価して、この人を落胆させることはできないと思い、「できない」と云えなくなり、必要以上に頑張り過ぎて、やがて息切れしてしまうことがある。

廣池は、開発とは根本的に人格を改造することと述べている。それには、単なる人間の感情や主義・主張・個人的な信条を超えた基準に従い、心を調整することであると述べている。実際には、基準に従うように努力している人間が未熟なのだから、自分の都合に合うように解釈する傾向があることになる。

#### (4) 人間の本性と開発

人間の本性・意識・無意識については、最近の科学研究が発達してきた。脳の研究、意

識の研究、数々のパーソナリティ理論が出現した（永江誠司著『脳の発達と心理学』ブレーン出版、2004年）。それらに共通した意見として、人間は、一度確立した認識パターンを何度も使い、それが時代遅れになっても、役に立たなくなっても、同じ認識パターンを使う傾向があるということである。つまり、人間は過ちを犯しやすいということが実証されたことになる。

しかし、廣池はこのような人間の本性さえも変化させることができると主張している。廣池は、道徳という地点から人間性という映像を映し出すことによって、生物的な脳や個人の癖や習慣を超えることができるとした。しかし、現代科学は、まだこの設問に完全なる解答を与えることができていない。そこで、普通の人間が出来ることは、誤りをチェックする機能を備えることである。信頼できる第三者の意見を聞くとか、相談するとか、あるいは原理原則に照らし合わせて判断するとか、2重・3重のチェックシステムの開発が望まれる。

次の注意点は、人間の抱える悩みとは何か、あるいは悩んでいる人・心は、どのように機能するか〈くしないか〉という理解である。

悩みや課題を持たない人は存在しない。人間の発達学の研究によると、人間は成長するにつれてさまざまな課題をつきつけられてそれを解決することを迫られる。例えば、青年期には結婚や就職の問題、老年期には変化した身体を受け入れ、希望をどのように次世代につなぐかという課題がある。従って、生きていること自体が、次々と課題を抱えることになる。また、人生の苦難はいつでも訪れてくる。お釈迦様は、人間は生老病死という課題を抱えると指摘した。従って、問題を抱えるとは、ごく普通のことであり、人間的なことになる。ただし、問題とどう向き合い、取り組むかはかなり個人差がある領域である。

廣池は「人心を開発して品性を完成する」と述べている。また、開発は精神的で消極的な行為であるとも述べている。つまり、開発とは事業の拡大とか、自己の物質的な利益を積極的に追求し、あるいは他者を積極的に開発するという行為ではない。他者を自己の意のままにコントロールしたり、教育したり、改造したりする行為でもない。他者を開発することは、自己の過失や心のホコリによって生じた害を償い、自己の人格を根本的に改造して真の安心の境地に至る方法なのだ。自己利益を直接的・積極的に追求しなくても、消極的・精神的に、しかも確実に、まず自己が真の利益を受け、次に開発を受けた側にも利益が及び、両者ともに安心の境地を開けるのがポイントとなる。その意味では、開発が真の平和な社会をもたらす源になることになる。

この消極的な動機による開発という視点は、現代の教育学にもカウンセリング理論にも欠けている。これは、教育は主に専門家による児童・生徒教育という積極的な行動を意味し、カウンセリングは、比較的に精神的に健康な人が、援助を必要とする脆弱になっている個人を対象にする救助行為を意味することが理由となる。このことは、カウンセリング・マインドと呼ばれる日常の心づかいや技術にも当てはまる。つまり、効果を期待し、それを測定することが理論に埋め込まれているので、当然なものとして努力の効果を他者に求める傾向にある。これが、カウンセリングの潜在的な欠点となる。



### (5) 開発の技術

廣池は「動機と目的と方法と誠を尽くす」と述べている。開発は、高度な人間の精神活動なので、動機と目的に心が集中しがちになる。それが、方法・技術が軽視される傾向になるといっても過言ではない。

最近の人間関係科学は進歩し、特に心理学では、集団の心理や人間の行動が科学的に解明されている。例えば、不安の対処方法、適切に自己主張する方法 (assertion)、話の焦点を上手に合わせる方法 (focusing)、怒りのコントロール方法、対人関係の争いを解決する方法 (ADR 方法)、実行のための目標設定の方法、決心や自己決定する方法、身体とところの管理方法、等々とたくさんの方が科学的に開発されている。

技術は、学び・訓練し・トレーニングを積んで始めて生かすことができる。始めはうまく出来ないのがあたりまえである。自己練習も可能だが、技術はその分野で卓越した人から学ぶのが一番よい方法である。開発の方法にも、同じことが当てはまる。

### (6) 開発の倫理的責務

開発は人間を対象にするので、当然、高度な倫理感覚や基準が求められる。一般的には、次の1～4までの4つの倫理原理 (ピーチャム、チルドレス) とカウンセリングで扱う追加の5～6の2つの原理である6原理を理解すれば十分に現代倫理に適合した行動ができる。せっかくの道徳行為が、倫理原則を知らないために、自分も他人もひどく傷つくことがある。そこで、廣池の開発論を現代に適応する際には、以下を参考にするとよい。

- 1 「自律尊重の原理」開発する側は、対象となる人の自律する力や尊厳を尊重して、個人の考え方を一方的に押し付けたり、あるいは過度に依存させたりする状態にしてはいけない。自己決定できない人は、自己決定できるように援助する。代諾者が必要な場合はそのようにする。
- 2 「仁恵原理」開発行為が、される側にとって真に利益のあるものでなければいけない。開発する側の利益を優先しないこと。例えば、会員を増やすとか、名声を得たいとか、役に立ちたいという気持ちが必要以上に過剰でないこと。
- 3 「公正の原理」開発する行為が公正になされること。つまり、人によって極端に扱いが違ったり、自分の好き嫌いや、その場の一時的な感情に基づいたりする行為ではなく、公正な原理に従った行動であること。
- 4 「無危害原理」開発することが、される側にとって危害を及ぼさないこと。つまり、〈精神・物質・身体等〉を傷つけたりしないこと。単なる善意だけでは、他者を傷つける恐れがある。また、効果が予定より早いと、バランスを崩すことがある。
- 5 「誠実な関係原理」、開発は、誠実な人間関係に基礎があること。嘘で固め、相手を搾取しないこと。あるいは、心理的に操作しないこと。
- 6 「忠誠原理」個人の秘密を守ること (黙秘の徳を守り、隠された事柄を必要以上に探求しないこと)。個人の秘密は知る必要がない、必要なだけ知ること。

註) T. L. ビーチャム、J. F. チルドレス著『生命医学倫理』(2009年、麗澤大学出版会)では1~4の4つの原理が述べられている。これらにカウンセリングでは忠誠と正直を付け加えることが多い(Jordan & Meara, 1990)。

#### 4. 結論——モラロジーとカウンセリング

以上、〈人心開発救済の原理〉を現代カウンセリングという枠で理解するとどのようになるかを記述した。その特色を人心の開発を中心にまとめてみると以下になる。

- 1 カウンセリングの対象は普通の悩める人間である。カウンセリングは、下程論文にあるように人間の本質を獲得するために援助するものである。本質とは、対人関係(interpersonal)、自己との関係(intrapersonal)の回復である。従って、スーパーヒューマンにいたる援助を行うものではない。しかし、この人間の本質は、スーパーヒューマンと思われる聖人の中にも存在するものでもある。
- 2 カウンセリングは、カウンセラーとクライアントの関係性(信頼)が変化を起こす大きな要因となる。信頼関係の中で、自己理解が深まる。その意味では、人心の開発救済と同じことを言っている。
- 3 不完全な人間が行う開発救済活動には、さまざまな留意点があることが、カウンセリング研究によって明確になった。例えば、転移関係、カウンセリングプロセスの理解、共感する技術訓練など。
- 4 開発の直接の目的は、単なる人間愛や正義の実現ではなく、他者の救済でもなく、自己の品性完成である。他者救済は間接的なものとして副次的に生じる。従って、圧力をかけたり、効果を急いだり、脅したり、なだめたりなどという過剰な力を用いない。しかし、エヴィデンスを重視したカウンセリングは、潜在的に効果や社会適応を得たいという動機があるので、弱者に力を加えて危害をおよぼす危険性がある。
- 5 精神的なものを尊重するモラロジーは、学問としての開発技術研究をしてきていない。そのために、独自の共感技術を育てる研究も必要である。この領域は、カウンセリングから学ぶことができる。
- 6 カウンセリングは、〈生活する、悩める人間、本質的なものを喪失している人〉を対象とするので、同じ地平に立って理解し、共に悩み苦しむという共感的態度が必要不可欠となる。人間の悩みや苦しみを理解するという点では、カウンセリングから学ぶことは多い。
- 7 弱者、病者、不適應者、自己喪失者などの、身体、精神、社会面においてなんらかの悩みを抱える個人は、そのために大きな苦しみを経験している、客観的に明らかに大きな損失を被っている。これらのいわゆる社会的弱者が急性の問題から離れ、本来の人間本質を獲得することを援助することが急務となる。これが、カウンセリ

ングの目的なのだが、この活動には救済も含まれる。人間の本质は精神的存在なので、問題の捉え方 (conceptualization) や関係性を変化させることによって、問題の本质も変化する。

モラロジーは人間の精神に変化を起こすことができる有効な方法である。この精神性は、モラロジーからカウンセリングが学ぶことができる。

8 精神的な変革とは、利己的な生活から自我没却した生活に変化することである。精神と世界とのつながりを回復し、感謝して、報恩するという人間存在の本质を回復することである。カウンセリングには、この根本的な解決方法は含まれていない。不安定の中で安定を得る方法としては、カウンセリングは優れている。

9 人に働きかけることは、高度な倫理的配慮が必要になる。人間援助に関連する学問は、この経験が豊富である。モラロジーは、この経験から学ぶことができる。

以上、カウンセリングと開発との関係を考察してみた。互いに学ぶことが多い。

#### 参考文献

- Beauchamp, T. L. & Childress, J. F. 2001. *Principles of Biomedical Ethics, Fifth Edition* (『生命医学倫理』(立木教夫、足立智孝監訳、麗澤大学、2009年) Oxford University Press.
- Golman, D. *Emotional Intelligence: Why it can matter more than IQ* (『EQ ことこの知能指数』(土屋京子訳、講談社、1996年)。
- Hill, C. E. *Helping skills: Facilitating exploration, insight, and action, third Edition*. Washington, D.C.: American Psychological Association, 2009.
- 廣池千九郎『道徳科学の論文』広池学園出版、1961年。
- Jordan, A. E., & Meara, N. M. 1990. Ethics and the professional practice of psychologists. *Professional Psychology: Research and Practice*, 21, 107-114.
- Kelly, E. W. Jr. (1994). *Relationship-centered counseling: An integration of art and science*. NY: Springer.
- 御法川誠次郎「モラロジーカウンセリングの確立を求めて」『モラロジー研究61号』、2008年、59-96。
- Mayeroff, M. (1965). *On Caring*. New York: Harper and Row.
- 水野修次郎「自己反省の研究(その1) リフレクション、プロセス、ナラティブと自己反省」『麗澤大学紀要86』2008年7月、13-36。
- Mizuno, S. The self-examination of Dr. Chikuro Hiroike and its application to counseling 『モラロジー研究61号』2008年2月、29-50。
- 水野修次郎「自己反省の臨床的研究(その2) 大学生とカウンセラーの傷つき、反省、ゆるし」『麗澤大学紀要89』2009年12月、127-150。
- 水野修次郎『カウンセリング練習帳』おうふう、2009年。
- 永江誠司『脳の発達心理学』ブレーン出版、2004年。
- Prochaska, J. O., Norcross, J. C., & DiClemente, C. C., *Changing for good: A revolutionary six-stage program for overcoming bad habits and moving your life positively forward*. William Morrow Paperbacks, 1995.
- Prochaska, J. O. & Norcross J. C. 2010. *Systems of Psychotherapy: A transtheoretical analysis, seventh edition*. Belmont, CA: Brooks/Cole.
- Rogers, C. *The Carl Rogers Reader* (『ロジャーズ選集上』伊藤博・村山正治監訳) Edited by Howard Kirschenbaum & Valerie Land Henderson. NY: Sterling Lord Literistic Inc. 1989.

下程勇吉「カウンセリングの人間学的基礎」『モラロジー研究 8号』1979年3月発行、1-60。

下程勇吉「人間存在の階層構造」『モラロジー研究36号』1992年7月、1-11。

図2 変化を促進する技術

プロセス	目標	技術
意識化	セルフと問題についての情報を多く得る。	観察 対決 解釈
社会的な解放	問題のない行動について社会の中での選択肢を広げる。	抑圧されている人権を擁護する。エンパワメント、社会システムに介入する。
感情の高揚	自己の問題やその解決に対して抱く感情を経験し、表現する。	心理ドラマ、喪失悲嘆、役割体験
自己の再評価	ある特定の問題に関連して生じる感情と認知を評価する。	価値の明確化、イメージ作成、感情体験の修正
献身	変化できる能力を信じ、さまざまな行動選択からある行動を選びそれに献身する。	自己決定のセラピー、決意、ロゴセラピー
反論	問題行動と異なる別の行動を起こす代替方策を案出する。	リラクゼーション、脱感作 (desensitization)、アサーション、肯定的な自己表現
環境のコントロール	問題行動を発生する刺激を避ける。	環境の再構築 (アルコールを取り除く、肥満になる食品を排除する)。リスクの高いきっかけを取り除く。
報酬	変化を起こしたら自己に報酬を与える、他者によって報酬を受ける。	行動の結果についての責任の取り決め、潜在・顕在の強化子
援助関係	あなたをケアしてくれる人の援助の種類をリストアップする。	治療同盟、社会サポート、自助グループの存在

*Changing for Good*, p. 33から翻訳転載

(キーワード：人心開発、救済、カウンセリング)